新学術領域　第五班研究会

共催　世界文学研究会

日時：平成 22 年 9 月 30 日 17～19 時

場所：北海道大学スラブ研究センター４階　小会議室

参加者：21 名

題目：Home, sweet home?　現代英国エイジアン・カルチャーと移民文学

担当者：小松　久恵（第 5 班研究員）

本研究会の冒頭では、現代英国における移民文化、とくに南アジア系のいわゆるエイジアン・カルチャーが約３００枚の写真をもとに紹介された。ロンドンの代表的な移民居住区（Hounslow, Southall, Brick Lane, White Chapel, Upton Park）は、住民の出自（出身地域、帰属宗教）によってそれぞれに特徴があることがわかる。パンジャブ出身者が多数を占める Hounslow や Southall では、小さな町に立派なシク教寺院が二つ建立され、住人が集う場となっている。また標識の多くは、パンジャブ語を表記するグルムキー文字で書かれている。一方、バングラデシュ移民が多く暮らす Brick Lane ならびに White Chapel では、立派なモスクに人々が礼拝に集い、地域の標識はベンガル文字で記される。Upton Park にはウルドゥー語表記が目立ち、ハラールが明記された肉屋が軒を連ねる。また町を行く人々の中に、アフリカ系が多いのも特徴の一つとなっている。それぞれの地区のレストラン、マーケット、各種小売店の様子や、またインド文化センターの活動の様子などから、ロンドンにエイジアン・カルチャーが色濃く存在していることが伝わった。

続いて現在活躍中のアジア系英国作家とその作品傾向が紹介された。９０年代までは二つの文化の間で揺れる主人公の葛藤が主要テーマであったが、最近はそのテーマがより多様性をもつ、個人的な語りに移行していると指摘する研究も存在する。本報告では報告者が最近特に注目しているヤング・アダルト文学が紹介され、中でも１０代半ばの読者から圧倒的な支持を受けている作家の一人、Bali Rai による作品がいくつか提示された。また、アジア系作家が描く家族像、特に母親像の変化に対する考察が試論として出され、他地域の文学研究者との活発な意見交換が行われた。

今回初めての試みとして、スラブ研究センター及び北大文学部の院生・若手研究者を中心とする「世界文学研究会」との共催で研究会を行った。最新の文学を含む移民文化の紹介というテーマが幅広い関心につながったためか、北大文学部の大学院生を含めた様々な研究地域、ならびに研究分野の研究者が多数あつまった。地域や分野を超えて集まり、一つのテーマを核にしながら自由かつ活発に意見交換が行われた、非常に有益な研

究会であった。参加者のうち他国文学を研究する複数の研究者からは、それぞれの研究対象との比較がなされ、類似点ならびに相似点がコメントされた。また歴史研究者による分析考察は、議論を深める重要な契機となった。さらに、英国出身の研究者ならびに英国留学経験者からのコメントは、現地を実際によく知る者ならではの非常に有益なものであったし、別の移民大国であるカナダ出身の研究者によるコメントも、比較という観点を可能にした大変興味深いものであった。今後、世界文学研究会をはじめとする他の研究会とも再び研究会を共催し、さらなる研究発展に努めたい。